

『マビノギオン』の「馬」のイメージを追って

— 物語と民話の中から —

中野 節子

古来、世界各地に見られる現象の一つに、人間と馬の親密な関係がある。この動物は、人が飼ってきた多くの家畜の中でも、犬と並んで、人間の社会と切っても切れないつき合いを続けてきた。日常生活の中で、狩猟や農耕や運搬といった人々の仕事の良き相棒として働いてきたばかりでなく、一旦ことが起ると、戦いの同伴者としても果敢に活躍してきたのである。ケルト人たちの社会で、彼らの存在は、一体どんなものであったのだろう。文字で綴られた文献の中から、中世ウェールズ幻想物語集『マビノギオン』(Y Mabinogion)と民話を例にとって、その中に現れる馬のイメージを追ってみることにしよう。

「ケルト」という言葉をどう定義するかについては、さまざまな議論のあるところである。ここでは、ひとまず地中海文化のいまだ及ばなかった、ヨーロッパの鉄器時代まで遡って、ケルト人の存在を考えて見ることにしたい。ギリシャやローマの学者たちが「ケルトイ」(Kelttoi)と呼んだ、同じような習慣と文化を持って暮らしていた人々である。さまざまな種族に分かれてはいても、武器の種類・装飾品・宗教の様式などから、彼らが同じような生活形態をとって暮らしていたことが分かる。紀元前3世紀頃から、彼らの使用していた言語の形跡が、人名や地名の中に刻まれるようになる。こんな点から考えても、これらの人々が、ローマ時代より500年ぐらい前から存在し、ローマの支配が終わった後も、中央ならびに西ヨーロッパに広がっていた地中海文化の影響を受けながら生活していたことは確かである。

I 鉄器時代 & ローマ時代 (600BC—AD400)

馬という動物がヨーロッパに紹介されたのは、紀元前8世紀頃、乗馬や物を牽引する役目を負ったことである。戦争や狩猟の際の彼らの働きは大変重要で、馬を所有することは、上流階級の武人たちにとって、自分たちの地位と権力を誇示する財産であった。ケルトの武人たちの名声は、す



— オーストリア、ハルシュタット出土の初期鉄器時代の短剣の鞘の文様—
(Naturhistorisches Museum, Vienna)



—ピーターバラ、ウエスト・ウッドブリッジ出土の青銅の騎手—
(Peterborough City Museum)

で紀元前1世紀頃から、ヨーロッパ中に知れ渡っている。シーザーの時代になる頃には、ゴール人 (Gauls) の間で使われていた、馬に引かれた戦車は次第に見られなくなっていた。しかしブリテンにおいては、すくなくとも紀元後1世紀頃まで使用されている痕跡が見られ、ローマ人の間でも一目置かれた恐ろしい武器であったのである。また馬の持つ並外れた繁殖力が、多産と豊穡のシンボルとして崇められていたのも確かである。馬たちはまた、宗教的儀式や葬祭の際も大きな役目を負わされていた。ヨーロッパの鉄器時代は、紀元前7世紀初め頃からローマ人の征服の頃までと考えられている。オーストリアのハルシュタット (Hallstatt) 文化の中で明らかなように、武人たちは自分たちの社会的地位を誇るかのように、馬のイメージを刻んだ多くの道具を所有していた。オーストリアのクラインクライン (Kleinklein) からは、紀元前7世紀から6世紀頃に刻まれたと推定されるバケツ状の容器に描かれた、日輪を連想させる車輪のイメージや、歩兵たちや騎馬武者の姿を描いたフリーズが出土している。これらは馬と日輪の関係が、鉄器時代の最初の頃から存在していたことを語る象徴的な例であり、両者の結びつきは、それ以前のブロンズ時代から連綿と続いていると考えられている。鉄器時代の神社やオッピダ (oppida) には、戦士・馬・切り取られた首などを示す絵が多く描かれている。このような文様は、ユトランド半島で発見された後期鉄器時代のグンデルストルップ (Gunderstrup) の大釜にも見られる。また多くのケルトの硬貨の裏には、後期ブロンズ時代からハルシュタット時代まで続いた馬と太陽のつながりを示す文様がさかんに用いられている。鉄器時代に流通していた、マケドニア (Macedon) のフィリッポス (Philippos) 二世が4世紀頃鑄造したと考えられる硬貨の裏には、日輪を示す戦車を駆るアポロ (Apollo) の姿が刻まれている。ケルト人たちはこの絵柄を借用して、自分たちの硬貨に用いていた。戦車の絵は次第に使われなく

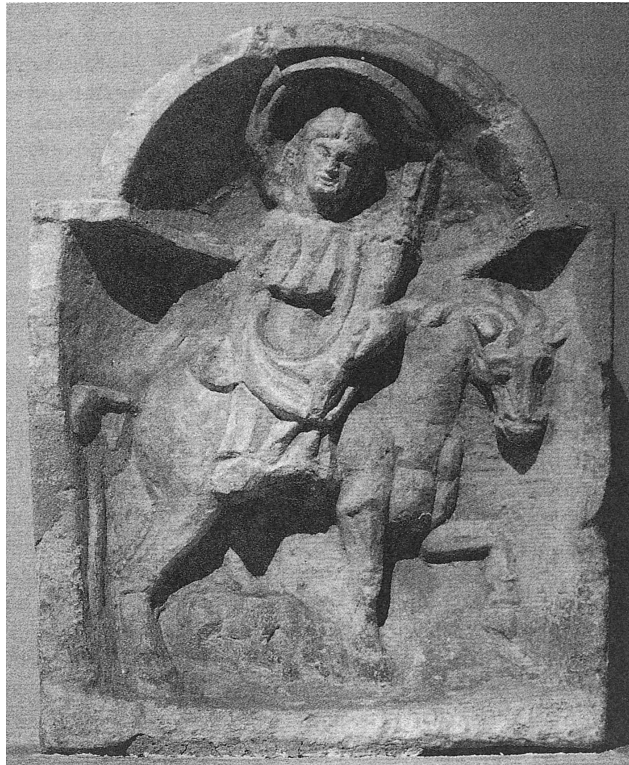
なり、その代わりに一頭の馬と太陽を象徴する車輪が描かれることが多い。車輪につけられている軸は、絶え間なく回転する、天空を巡る太陽を示している。

オックスフォードシャーのウェセックスの丘に描かれた14頭の白い馬たちの中で、「ウフィンントンの白い馬」(Uffington White Horse)と呼ばれる馬の文様だけが、後期ブロンズ時代頃(c. 900BC)に描かれ、明確にケルトの痕跡を残していると考えられている。

初期のケルト人の社会、ローマ人化されたケルト人の社会においても、馬のもつ重要な意味は引き継がれてゆき、さらなる重要な位置を獲得していた。このように、ローマ時代を通して連綿と続いた豊穡・富・太陽と馬たちの強い絆は、変わることがなかったのである。

A 馬の女神エポナ (Epona)

「エポナ」という名前は、ケルト語の「馬」を意味する「エポス」(‘epos’) から来ている。エポナは二種類の文様で描かれることが多い。一つは雌馬に横座りに座った女性の姿で、仔馬が乳を吸ったり、膝の上に置かれていたりする。もう一つは、2頭またはそれ以上の馬の間に座る女性という姿で描かれる。この女神は、ケルト化されたヨーロッパ全般で崇められており、特にバーガンディ族(Burgundian)の間で尊敬される女神であった。スコットランドや北アフリカにもその痕跡は見られ、ローマの宗教暦では、12月18日が彼女の祝日と定められている。やがてエポナは戦士たちと馬を守る女神として広まっていく。もともとのバーガンディ族の間では、家内の繁栄と富を守る女神として崇められていたのだが、次第に、生から死へと導く女神として、人々の間で信仰されるようにな



—バーガンディ、ムルソ近く出土の「エポナ」の肖像—
(Beaune, Musée des Beaux Arts)

り、死者を守り、魂を別世界へ安全に導く女神と考えられたのである。彼女が持つ鍵とマップ（mappa）という布がそれを象徴している。マップというのは、ローマ人のスポーツ競技で、馬の競争の開始を知らせるとき使われる布である。これは物事の始まりを意味し、人の死を象徴する鍵と合わさって、人の一生を司る女神と考えられていたのだった。

B 天かける騎馬武者

天空を闊歩する騎馬武者のイメージは、ギリシャ神話のアポロ（Apollo）に明らかである。その姿を彷彿とさせるのが、ケルト社会に見られる天を巡る騎馬武者の姿である。この両者が太陽と深く関わっているところも一致している。アポロ（ローマ神話の天空神ジュピター（Jupiter））と重なるこのケルトの騎馬武者の姿は、悪鬼・暗黒・死を征服し、季節ごとの豊穡を司る存在として、広くローマ化されたケルト人の世界で崇められていた。

以上見てきた如く、力・速度・勇気・美・知恵等を兼ね備えた馬という動物は、ケルト人の社会で戦士たちと深く結びつき、誇りを重んじ、戦いを好む上流階級の人々にとっての大切な財産の一つとなっていたのである。同時にまた、天空と太陽を崇める信仰に深く結びつき、馬の持つ繁殖力が、家内繁栄と豊穡を司る女神エポナのイメージを想起させるものでもあった。このように、人々の馬への信仰の根源には、「保護」と「守り」がある。一方で、女神エポナの軍事的な力は、単に人間同士の敵に対してばかりでなく、病や飢饉といった領域までもに広がって考えられており、その上に、力に満ち、多産な馬への信仰と重なって、初期のヨーロッパ一帯に広く普及していたことが分かる。



—セウェリン・アップ・イオルウェルス（1173～1240）の騎馬武者の印章—
（National Museum of Wales）

II ケルト語の「馬」について

印欧諸語の中の「馬」を意味する言葉のうち、もっとも初期のものは、Q ケルト語またはゴイデリック語に属する、初期アイルランド語の 'ech' であると考えられている。時代が経過するにしたがって、ブリトン語系ではウェールズ語の 'march' が、またゴイデリック系ではアイルランド古語の 'marc' が、使われるようになっていった。

中世になると、ロマンス語のなかのラテン語 'caballus' の影響で、ウェールズでは 'cafall' または 'ceffyl' という語がさかんに使われるようになり、これに相応して、アイルランド語の 'capall' が使われていた。ウェールズ語で現在一般に使用されている「馬」を意味する語は、'cffyl' であり、'march' の方は、もっぱら文章に記載するとき使われている。

10世紀頃、中世ウェールズで書かれたと考えられる『ヘウエルの法典』(Cyfraith Hywel) には、馬にまつわる取り決めが多量に残されていて、中世社会での馬の重要性を示している。

人・出来事・物品等、強い関連をもつ三つのものをまとめて記す、ウェールズ固有の文芸の様式「三題歌」(trioedd) の最大の集成本に、13世紀頃の、『ブリテン島の三題歌』(Trioedd Ynys Prydain) がある。「馬の三題歌」(Trioedd y Meirch) が記載されているもっとも古い文献としては、『カマーザンの黒い本』(Llyfr Du Caerfyrddin, c. 1100) が考えられる。その他にも、『レデルッフの白い本』(Llyfr Gwyn Rhydderch, c. 1300-25)、『ヘルゲストの赤い本』(Llyfr Coch Hergest, c. 1375-1425)、そしてまた、「ペニアルス写本16」(Peniarth MS 16, c. 1100) の中にもいくつかの例を見ることがができる。その中には、ウェールズの歴史上の英雄ベリの息子カスワッサウン (Caswallawn son of Beli)、豪腕のカラダウグ (Caradawc Freichfras)、アルスル (Arthur) などが記載されており、二人の重臣カイ (Cai) とグワルッフマイ (Gwalchmai) と共に、彼らの馬たちの名前もまた明記されている。馬を表す言葉は二つ、'eddystr' (軍馬)、そして 'march' (種馬) である。『マビノギオン』の中で、これら三題歌に登場する馬たちの名前が登場するのは、「キルッフとオルウェン」(Culwch ac Olwen) のことである。

III 『マビノギオン』の中の馬たち⁽¹⁾

1) リアンノンと馬

「マビノーギの四つの物語」(Pedair Keinc y Mabinogi) を通じて語られているのは、プレデリ (Pryderi) という若者の一生である。

第一話「ダヴェドの大公プイス」(Pwyll Pendeuic Dyuet) は、主人公の父となるダヴェドの大公プイス (Pwyll) と母となるリアンノン (Rhiannon) との物語から始まっている。

プイスがこの世の人物であるのに対して、母となる女性リアンノンは、異界からやってきた人物で、特別な性質が与えられている。彼女の名前からして、ケルト神話に登場するリガントーナ (Rigantona) 〈「女神の女王」〉を連想させる。その上に、ローマ人の間でよく知られていた「馬の女神」エボナ (Epona) を想起させる不思議な人物となっているのである。まず彼女がダヴェドの地にやってくる様子は、次のように描写されている。

一同のものが腰をおろすと、青みがかった白毛の、大きくてりっぱな馬に乗った貴婦人が、きらきら輝く錦織の絹の衣装を身にまとして、丘のそばの広い道をやって来るのが見えた。だ

れの目にも、その馬は、ゆっくりとむらのない足どりで走っているように見えた。やがて、馬は丘の頂上へ近づいてきた。(27)

この婦人は一体だれなのだろうといふかるプイスは、家来たちに命じて馬を止めさせ、それを確かめさせようとする。しかし彼女の乗った馬は、普通の馬とはまったく違っていただった。

そこで、その従臣は馬を連れて戻り、あとを追った。広々とした平らな草地まで来ると、馬に拍車をかけた。だが、拍車をかければかけるほど遠くにはなれてしまうのだった。それでいて、その人の馬は同じ歩調を保っていた。従臣の馬はぐったりしてしまった。これ以上の速度はどうにも出せない知ると、従臣はプイスの元に戻ってきて言った。

「殿。何者といえども、あの方を追うのはむりかと思われませう。この国には、この馬にまさる駿足はおりませぬ。それでもなお、あの方に追いつくことができないのですから」

「わかった。ここには何か魔法の意味あいがあるのだ。ひとまずは、館に戻るとしよう」(28)

テキストに記載されている、この貴婦人の乗る「青みがかった白毛」(‘canwelw’)の馬の色彩は、明らかに異界からやってきたことを示しており、近づけば近づくほど遠くになってしまう馬の足取りも、まさにこの世の馬のものとは思われぬ。プイスの言葉にもあるように、確かにそこには大きな「魔法の意味あいがあった」(‘Y mae yno ryw ystir hut’)のである。

その後起るさまざまな事件の中でも、この女性は常に主導権を取って行動する。不覚にも、「何でも進ぜよう」と答えて、恋敵にリアンノンを奪われそうになったプイスの苦境を救ったのも、このリアンノンであった。しかし、めでたくプイスとは結ばれたものの、リアンノンは、生まれたばかりの子どもを失い、無実の罪を負わされて宮殿の寝室を追われ、罪の償いをさせられるという不幸に襲われる。彼女に課せられた償いの行為もいささか変わっている。そこにも、馬との強い繋がりがうかがわれる。

リアンノンに課せられた償いの行というのは、7年の月日が経過するまでアルベルスの館にとどまり、毎日、門のわきにある乗馬台のそばに座って、通りがかりの、まだこの事件を知らない人々に物語の全容を伝え、客人であろうと見知らぬ人であろうと、希望する者があれば背に負って運んでやることだった。だが、実際のところは、彼女のこの申し出に従う者はすくなかった。(44)

生まれてすぐに、母のそばから姿を消してしまったリアンノンの子どもは、同じダヴェドの地に住む領主テイルノン・トゥリヴ・ヴリアント(Teyrnnon Twyrf Uliant)という人物に育てられることになる。彼もまた、ケルト神話の「偉大な領主」、ティゲルノス(Tigernonos)を連想させる特別な人物である。またこの子どもが見つけれられた背景にも、馬にまつわる不思議な雰囲気が漂っている。

テイルノンの館には、一頭の雌馬がいた。領地内のどんな馬よりも美しくりっぱな馬だといわれていた。毎年、五月一日の前夜に、この馬は一頭の仔馬を生んだ。ところが、その後だれ一人として、仔馬の消息を耳にする者はいないのだった。……(44-5)

ケルトの暦では、冬が終わり夏が始まる季節の交代の頃は、「カランメイ」(Calanmei)と呼ばれ、この世とあの世との交流がなされ、さまざまな異変が起る、一年の中でも特別なときと考えられていた。自分の馬に何が起るのかを見極めることにしたテイルノンは、その晩、雌馬を建物の中に連れてきて、武器を手に見張りに立つことにする。

夜もふけぬうち、雌馬は一頭の仔馬を産んだ。大きな美しい仔馬で、生れ落ちるとすぐに立ち上がった。テイルノンは思わず身を起こして、そのしっかりとした様子にすっかり見とれてしまったほどだった。

そうしているうちに、騒がしい物音が聞こえてきた。

と思うと、見よ、大きな鉤爪が窓から家の中につっこまれ、雌馬のそばにいる仔馬をひつつかんだ、テイルノンは剣を抜きはなち、その腕を肘のところから切って捨てた。その結果、仔馬とともに腕の大部分が、家の中のテイルノンのそばに残されることになった。(45)

テイルノンと妻は、この子どもを自分の子として育てることにした。子どもは、ぐんぐん大きくなり、やがて夫妻の決断によって、プイスとリアンノンのもとに返されることになる。そのとき少年は、いっしょに育てられていた件の仔馬に乗っていったと述べられている。

第三話「スィールの息子マナウイダン」(Manawydan uab Llyr)で、リアンノンは、プイス亡きあと、息子ブレデリの薦めでマナウイダン(Manawydan)と再婚する。しかし、リアンノンは息子のブレ德利とともに、突然にダヴェドの地から姿を消してしまう。それは一話で彼女に拒否され、プイスにさんざんに辱められたクリトの息子グワウル(Gwawl)の友人スィウイト(Lleyt)がかけた呪いのためだった。物語りの最後には、賢明なマナウイダンの尽力によって、母と子は、無事ダヴェドの地に戻ってくる。二人がどのようにして捕らわれていたのか問うマナウイダンに対するスィウイトの答えは、まことに意味深い。

「ブレ德利どのは、首のまわりに杭打ちの大槌をぶらさげ、リアンノン奥方は、干草を運ぶ驢馬の耳飾(カラー)をつけておられた。その姿で、ずっと捕らわれておいでであった」とスィウイトが答えた。(98)

ウェールズの社会で重要な地位を占めていた、鍛冶屋と馬を想定させる二人の姿であったのである。

このように、リアンノンの上には、ローマとケルトという二つの社会で崇められていた女神の姿が重ねられ、彼女の半生に起るさまざまな出来事には、常に馬の存在が深くかかわっている。

リアンノンの乗った、「青みがかった白毛の、大きくてりっぱな馬」(uarch canwelw mawr aruchel)は、別世界の馬を連想させるし、乗馬台のところへ座っていて、通りかかる人を背に載せて運ぶという彼女に課された罰も、馬の労役を連想させる。その後のリアンノンにまつわる数々のエピソードにも、全てにわたって馬との関連が暗示されているのである。

2) ブランウエンと馬

「四つの物語」の第二話「スィールの娘ブランウエン」(Branwen uerch Lyr)の物語は、アイルランドとウェールズの二つの国を舞台にして展開されている。

アイルランド王マソルッフ(Matholwch)と「この島の三人の女家長の一人」、であり、「強者の

島の姫君」でもあるブランウェン (Branwen) との結婚が無事に成就したのち、一家の問題児であった異母兄エヴニシエン (Efnisien) によって、その平和は完全に打ち壊されてしまう。あとからその場に戻ってきたエヴニシエンは、厩舎にいる見慣れぬ馬がマソルッフのものだと知り、妹ブランウェンとの結婚が滞りなく執り行われたことを知り、激怒する。

「わが妹ほどのすぐれた乙女に対する仕打ちが、そんなものであったとは。この私になんの相談もなしに、ブランウェンを嫁がせただと！これ以上の侮辱があろうか」とエヴニシエンは言った。

それから彼は馬に襲いかかって、その唇を歯がむき出しになるところまでひき裂き、耳は頭のところまで、尾は背のところまで切り裂き、脛をつかめるところでは、ひつつかんで骨に達するところまでひき裂いた。こうして、馬たちを、使いものにならないほどに傷つけてしまったのだった。(56)

こんなにもひどく馬を凌辱するということは、とりもおさずその持ち主の誇りを徹底的に傷つけたことになる。馬という存在は、武人の誇りとする、最大の財産の一つであったからである。マソルッフと随員たちの戸惑いもさることながら、兄のベンディゲイドブラン (Bendigeiduran) の驚きと悲しみは察して余りあるものであった。彼はすぐに償いをしたいと申し出て、役に立たなくなった馬1頭につき、それぞれ1頭ずつの健やかな馬が提供されたうえに、さまざまな償いのものが与えられた。

馬による償いの様子は、次のように述べられている。

つぎの日の朝、数の続くかぎり、よく調教された馬がマソルッフに提供された。それからベンディゲイドブランはマソルッフといっしょにべつの地方に出かけてゆき、そこで勘定があうまで、子馬で馬の償いがなされた。そのためこの地方は、タル・エボリオンという地名がつくようになった。(59-60)

「仔馬による支払い」(‘tal’ + ‘ebolion’) という意味を持つこの地は、いままウェールズの地に残されている。また、ここには調教された馬はそうでないものより高く評価がされる、ウェールズ社会の決まりが伝えられている。

しかし、「四つの物語」の第3話「スィールの子マナウイダン」(‘Manawydan uab Llyr’) には馬の登場はなく、唯一4人の登場人物たちが手がけた仕事の中で、彼らの鞍頭をつくる技術が評価されているくらいである。(81)

また、第4話「マソヌウイの子マース」(‘Math uab Mathonwy’) の物語においては、アンヌヴン (異界) からの贈り物である豚を譲りうける代償として、グワイディオン (Gwydyon) が魔法で作った「12頭の種馬」が登場するのみである。(104)

3) 「キルッフとオルウェン」の中の馬たち

「アーサー王物語」のかずかずのエピソードの中でも、最初の話を提供していると考えられている、「キルッフとオルウェン」(‘Culhwch ac Olwen’) の物語では、継母に呪いをかけられる若者キルッフ (Culhwch) が主人公となっている。

オルウェン (Olwen) という娘の名前を聞いただけで、激しい恋に落ちたキルッフは、どこにいるのかも分からないこの乙女を求めて、冒険の旅に出かけてゆく。それを助けるのが、アルスル (Arthur) の宮廷の戦士たちということになっている。乙女の父の巨人の長イสบザディン (Ysbaddaden) の出した39件の課題の中でも最大なものが、大猪トルッフ・トロイス (Trwch Trwyth) 狩であった。

若者キルッフにまつわる馬の描写もなかなか興味深い。

まずテキストは、若者が従兄弟にあたるアルスルの宮廷に向かうときの様子を、

少年は、淡い灰色の頭と貝殻の形のひづめとしっかりした脚をもち金の管状の轡をはむ、4年の冬を越した駿馬にまたがって、走り出ていった。・・・(160)

と描いている。また宮廷に入ってゆくキルッフを、

・・・ほとんどの人は、乗馬台のところで馬を下りるのだが、キルッフはそうはせず、騎乗のまま中に入ってきた。(163)

と記している。

まず、「淡い灰色の頭と貝殻の形のひづめとしっかりと脚をもち金の管状の轡をはむ、4年の冬を越した駿馬」('g)orwyd penlluchlwyd pedwar gayaf guylgygwng carngragen, a frwyn eur kymbiawc yn y penn') という表現に注目したい。馬の評価にあたって、大変尊重されていた「貝殻の形」をもったひづめと「しっかりと脚」はもちろんのこと、馬が一番元気がよい時期とされる「4年の冬を越した」駿馬という表現の中に、颯爽とアルスルの宮廷に向かうときの若者の姿がいきいきと描写されている。

また、期待と気負いで、礼儀までも忘れてしまった若者の姿は、「騎乗のまま中に入ってきた」というところで彷彿とさせられるのである。

自分の願いをかなえてもらいたいと、キルッフはアルスルの戦士たちの名をあげて頼む。その中には「三題歌」に記載された馬の名前が含まれている。

- 1 ブルッフ (Bwlch) とキヴルッフ (Kyuwlch) とセヴェルッフ (Seuwlch) の馬たち—
カス (Call)・クアス (Kuall)・カヴァス (Kaull) (71)
それぞれ「割れ目」, 「完全」, 「誇り高さ」という意味をもつ3人の戦士の所有する馬たちは、それぞれに「策略に富む」, 「素早い」, 「馬」という意味をもつ馬たちである。
- 2 モロ・オイルヴェダウク (Moro Oeruedawc) の馬デイ (190)
デイ (Du) というのは「黒」という意味をもっている。
- 3 グウェドウ (Gwedw) の駿馬グウィン・メグドゥン (Guyn Mygtwn) (189)
この馬は、「暗白色のたてがみをもつグウィン」という、さながら波のように速く走る馬と言われている。最後の難題であった猪狩りでは、モドロンの子マボン (Mabon mab Modron) がこの馬に乗って猪を追いつめ、ハヴレン川に入ってゆくのである。(211)
- 4 アルスルの駿馬サムライ (Llamrei) (204)
「灰色の跳躍者」とか「早足の者」という意味の名前をもつ馬で、最後の猪狩りでは、アルスルを乗せて活躍する雌馬である。
また、戦いの場所に「雌馬」('caseg') によって赴くというのは、きわめて珍く、アルスル

の場合にのみ適用される特別な例である。

4) 「ロナブイの夢」の中の馬たち——色彩の饗宴

父マレディズ (Maredudd) から与えられた領地をめぐるの、二人の兄弟マダウク (Madawc) とイオルオウェルス (Iorwoerth) の戦いに加わった、一兵卒ロナブイ (Ronabwy) の見る夢の物語は、着飾った馬たちが登場する色彩にあふれた物語であり、『マビノギオン』の11篇の物語の中でも一風変わった雰囲気をもっている。

まず夢の中で、ロナブイが最初に見た馬の様子は次のように描写されている。

黄色い巻毛の、ようやく髭を剃りはじめたばかりという若者が、黄色い馬に乗ってやって来るのが見えた。膝から下は緑色だった。・・・(218)

そして「乗り手と馬の装いの、緑は樅の木の緑、黄はバナディルの花の黄さながらであった」と記されている。この若者は、「プリダインの攪乱者イダウク」(Idawc Cord Prydein) というあだ名を持つ、メニオの息子イダウグ (Idawc uab Mynyo) であった。

次にやってきたのは、デオルサッハ・ウレディグの息子ルアウン・ベビル (Rwawn Bybyr uab Deorthach Wledig) である。

騒動の起っている方角に目をやると、見よ、黄色がかった赤い髪、まだ髯も口髭もない、育ちのよい風格の若者が、軍馬に乗ってやって来るのが見えた。馬の両肩の先から膝の下までは黄色、乗り手のまとった衣装は紅の絹の錦織に黄金色の糸で縫い取りが施され、マントの裾には黄色の縁飾がついていた。人と馬の装いの、黄はバナディルの花の黄、紅はもっとも真紅の血の色よりも紅だった。(219-20)

またロナブイたちは、遠くハヴレン川に面したリッド・イ・グロイス (Rhyd-y-groes) の地にやってくると、浅瀬に続々と集結してくる軍団の姿を見る。最初にやってきたのは、ルアウン・ベビルの同志たちの、血潮の真紅一色で染めあげたような軍団で、彼らは浅瀬の上流に天幕を張った。

見ていると、やがて、べつの軍団が浅瀬の方にやってきた。馬たちの鞍頭から上は睡蓮のような白、それから下は黒玉のような黒だった。(222)

次にやってきたのは、このうえなく華麗な二つの軍団である。

まず、まぶしいほどに白い軍団がやって来た。それぞれが身にまとうのは絹の錦織の純白のマント、その縁どりは漆黒。膝当てと馬たちの前脚の上部は黒く、馬体のほかの部分には青みを帯びて白。純白の軍旗は先端部が漆黒であった。(224)

この軍団は、スウェッフリン (Llychlyn) (スカンジナビア) から来た、アルスルの第一の従兄弟にあたるマイルハンの息子マルフ (March uab Meirhawn) の軍団である。

次には、デンマルク (Denmarc) から来たニZZの息子エデルン (Edern uab Nudd) が率いる軍団がやって来る。

すると、もう一つの軍団が近づいてくるのが見えた。それぞれが身にまとうのは漆黒の衣装、マントの縁どりは純白。馬の前脚のつけねから膝頭までは白い。漆黒の軍旗は先端部が純白であった。(224)

アルスルの従僕エイリン・ウィフ・アムヘイビン (Eiryn Wych Amheibyn) の乗る、「たてがみが二つに分かれて首の両脇へ垂れた大きな赤毛の馬」のことも書き留められている。(225)

しかし、戦闘状態が整ったにもかかわらず、肝心の総大将アルスルは、一向に戦いに出陣しようとはせず、グウィズブイス (gwddbwyll) の盤を持ち出し、ウリエンの息子オワイン (Owein uab Uryen) と試合を始める。

やがて、天幕の一つから従者がやってきて、アルスルとオワインのカラス軍団が激しく戦っていると報告する。しかしアルスルは、試合にかまけて一顧だにしない。二番目の従者、三番目の従者の報告にも、アルスルは注意を払わず、家来たちにカラスを痛めつけるの止めさせて欲しいというオワインの願いを無視してしまう。

いよいよオワインのカラスたちとアルスルの従者たちの戦いが激しさを増して最高潮に達したとき、二人のもとに三人の騎手がやって来る。最初の騎手は灰色のまだらの馬に乗っていた。

彼の馬の色彩は、まことにふしぎなものだった。灰色のまだらで、右側の脚は鮮やかな赤、脚のつけねのところからひづめの先端までは鮮やかな黄、馬の乗り手も外国製の鎧をまとっていた。馬のつけている鞍敷は、膝頭から上のほうは真紅の絹のセングル織、膝頭から下のほうは混じりけのない黄色だった。・・・(229-30)

劣勢にたったアルスルの家来たちに襲いかかるカラスどもを制止するやうにという命令に、今度はオワインの方が耳を貸す素振りもない。次にやって来たのは、青白い馬にまたがった一人の騎士だった。

馬の左側の脚の下部、ひづめの中ほどまでは漆黒、乗り手と馬は大きな緑色の鎧を身にまとって盛装し、黄色い絹の錦織の外衣をはおり、外套の縁飾りは緑色だった。馬の装いは漆黒で、縁飾りは鮮やかな黄色だった。・・・(231)

最後にやってきた騎士が跨る馬は、

・・・馬の左脚つけねの部分は混じりけのない赤、右脚のひづめの中ほどまでは純白だった。乗り手と馬は、イスパインのラクトウン製の、まだら模様の黄色い鎧を身にまとい、馬と乗り手の外套は白と黒の染め分け、マントの縁飾りは金を帯びた紫。・・・(231-2)

と描かれている。そしてこれら三人の騎手たちは、ムルヘスの息子ブラサオン (Blathaon uab Mwrheth)、デオルサッハ・ウレディクの子ルアン・ベビル (Rwawen Bebyr uab Deorthach Wledic)、そしてヘヴァイス・インスエン (Hyfaidd Unllen) であったと記されている。

こうして、一兵卒ロナブイが見た夢は終わり、物語の最後には、次のような驚くべき言葉が残される。

この物語は「ロナブイの夢」と呼ばれている。そしてここに、だれ一人として、たとえバルズにせよ物語の語り手にせよ、一冊の本の助けなくしてはこの夢物語を記憶できないわけがある。それは、すべて馬上にある数々の色彩や、武具、礼服、高価なマント、魔法の石などの、たぐいえない多彩さのせいなのである。(235)

ここに登場してくる、馬たちとその飾りや装備の華やかな色どりは、まさに色彩の饗宴とも言うべきもので、口移して語られていた語り物の範疇をはるかに越えていると物語は記している。

この物語は、12世紀のロナブイという一兵卒が主人公となって語られてゆく夢の物語である。彼が遭遇するのは、5世紀頃に活躍したと考えられているウェールズの英雄アルスルの戦いの様子である。しかしながら、そこに登場するアルスルは、盤上のゲームにかまけて、一向に戦おうともしない怠慢な指揮官である。一方で、脇役として登場してくる馬たちや騎士たちのまとう馬具や衣装には、眼もくらむばかりの華やかな色彩がちりばめられている。これらを考え合わせると、きわめて皮肉な語り口となっているのが分かる。ウェールズ地方の名馬の産地として知られるポウイス (Powys) 出身の人物によって、すでに歴史や伝説上の有名人物となっていたアルスルを、皮肉をこめて揶揄している物語であろうと想定される。

ウェールズの社会で長く続いた語りの伝統が終わり、書き言葉の世界が始まったことをはっきりと知らせる物語である。

ウェールズの語り物の伝統の上に、『マビノギオン』を考察する S. デイビーズは、最近の翻訳書で、この物語の配置を最後11篇目に置いたことも頷ける。

5) 「三つのロマンス」の中の馬たち

『マビノギオン』に収められた物語の中でも、これら三つのロマンスは、他のものとは違った雰囲気をもっている。それは、素材は全てウェールズの歴史や物語などから取りながら、物語の舞台になるのが騎士文化華やかだった中世フランスの宮廷であることである。そのため、これらは他の物語とは違って、ウェールズの地からヨーロッパ大陸、とくにノルマン・フランスの影響を強く受けたブルターニュの宮廷で、磨きをかけられたのち、再びウェールズの地に里帰りした物語と考えられているのである。

1. 「オワインの物語」の中の馬たち

この語り物の主人公オウアイン (Owein) というのは、6世紀頃活躍した「古き北地方」(Hen Gogledd) の指導者で、ウェールズの古詩の中に度々登場する英雄である。クレチアン・ド・トロワ (Chretien de Troyes) の『イヴァン』(Yvain) の中ではアーサー王の騎士の一人として活躍している。

冒険を求めて出かけてゆく3人のアーサー王の宮廷の騎士たち、オワイン、ケノン (Cynon)、カイ (Cai) の遭遇する一騎打ちの相手は、いずれも「漆黒の馬に乗り、漆黒の絹の錦織の衣装を身にまとい、槍の先に漆黒の麻の旗をひるがえした騎士」(245・246・259) と記されている。この騎士を打ち倒して冒険を続けるオワインに用意された馬は、「鞍をつけられ、苔のように赤いたてがみをした濃い栗毛の馬」(yd oed balfrei gwineudu a mygen burgoch idaw kyngochet a'r kenn yn barawt

gwedy y ystarnu un gyweir') (247) であったと述べられている。

2. 「ペレドゥルの物語」の中の馬たち

ウェールズの歴史の中で、ペレドゥル (Peredur) という人物についてはそう明確に述べられているわけではない。わずか6世紀の詩人アネイリン (Aneirin) の「ゴドズイン」 ('Gododdin') 中のリストに名を列ねているのみである。しかしその後、彼はアーサー王伝説の中のパルシヴァル (Perceval) として蘇り、聖杯の騎士の一人となって活躍するようになる。

『マビノギオン』のこの物語には、この英雄の幼な物語が語られている。少年ペレドゥルは、戦いの末、夫のみならず6人の息子たちを次々と失ってしまった母親の配慮で、人気のない荒れ果てた荒野に逃れ、戦いとは縁のないような心穏やかな人々の間で育てられている。しかしある日のこと、森の脇の乗馬道を通りかかったアーサー王宮廷の騎士たちに出会うことによって、少年の進むべき道は決まった。彼は、「騎士たち」に憧れ、後を追うことにするのである。その言葉を聞いた母親は、気を失って、死んだようになって倒れてしまう。

それなのに、ペレドゥルは、薪を運んだり、人家のある集落から荒野へ食料と飲み物を運んできたりするための馬が、飼われているところへやって来た。そして、いちばん強靱そうな、青白くて白と黒のまだらのある痩せた馬をひき出して、鞍のかわりに荷籠を乗せたり、馬の装備に似たようなものを取りつけたりした。それから、母親のいるところへ戻ってきたのだった。(277-8)

この若者が意気揚揚とアルスルの宮廷に入っていったとき、そこではたった今、見知らぬ騎士によって加えられた妃グエンフォヴァル (Gwenhvyuar) への侮辱を、どうにかするように言われはしまいかと、心配する騎士たちの緊張が広間一杯にみなぎってた。そこへ馬で乗り入れるペレドゥルの姿は、次のように描写されている。

そのとき、見よ、白と黒のまだら模様の青白い痩せ馬に乗り、みっともなく締まりのない馬具をつけたペレドゥルが、広間へ入ってきた。宮廷じゅうでも、ひときわめだって情けない姿だった。(281)

宮廷に垂れ込めていた緊張は一気に晴れたものの、面白く思わないのは、誇り高い重臣カイ (Cai) であった。あまりにも礼儀をわきまえない無礼な出立ちと思ったからである。

ペレドゥルの乗った「白と黒のまだら模様の、青白い、痩せ馬」 ('ar geffyl brychwelw yscyrnic') というのも、「キルッフとオルウェン」に登場する若者キルッフの駿馬と比べるとまことに情けない馬であり、二人の若者のコントラストが際立つところである。

3. 「ゲライントの物語」の中の馬たち

この物語りの主人公ゲライント (Gereint) は、オワイン同様、9世紀の「セワルッフ・ヘンの歌」 ('Llywarch Hen') にも歌われる勇士である。アルスルの戦旗を掲げて、サクソン人を相手に勇敢に戦ったと歌われている。ゲライントが最初に物語に登場する様子は次のように描かれている。

・・・うしろをふり返って見ると、柳の木のような灰色をした大きな馬に乗った人の姿が目

に入った。乗り手は王者の貴禄をもつ、亜麻色の髪とむき出しの脚をした若い騎士で、脇には金の柄のついた剣をつけ、絹の錦織の上着と外衣を身にまとい、足にはコルドヴァ革の短いブーツを履き、四すみに金色の林檎の縫い取りをした青紫のマントをはおっていた。馬は上機嫌で、元気よく、活気にあふれ、生き生きとした小刻みな歩調ですすんできた。(349)

しかし主人公ゲライントのこの美しく、すがすがしい姿は物語りの後半、美女イーニッド (Ynyd) と結婚してから後には、安寧をむさぼる騎士へと変身してしまうのである。彼はついには妻の操まで疑って、彼女を従え、復讐の旅に出る始末であった。クレティアンの物語詩『エレックとエニード』 (*Erec et Enide*) は、その辺りの様子をより詳しく語っている。

登場する馬たちの描写にも変化が見られる。他の物語との大きな違いは、その描写の中に、馬の体格や性格のようなものが事細かに描かれるようになるということである。

二人が森の中で遭遇する騎士たちの様子は、

彼らは、森の近くまでやって来た。すると、5人の騎士たちが森から出てくるのが見えた。気が荒く力が強くて頑丈そうな5人で、またがる軍馬は大地を蹴り、骨太で分厚く、鼻孔の大きいみごとな馬であり、人も馬も、十分な装備を身につけていた。(382)

そののち登場してくる二人の騎士たち、ブレニン・ベハン (Brenin Bechan) と伯爵の乗った馬たちも、「力強くたくましく、足取りも確かに進む、広いひづめと胸をもつ戦馬」 ('catuarch kerdetdrut llydangarn bron ehang') (394)、「鼻孔広く元気よく体格すぐれて装備もみごとな戦馬」 ('gaduarach froenuoll drud awyduawr eskyrnbrach') (410) と描かれている。馬上試合に明け暮れた武人たちに好まれた、すぐれた体格と気質をもった馬たちの姿がより詳細に描かれているのが分かる。いずれもノルマンの社会で珍重される軍馬のイメージである。

なお、「スイツとスエヴェリスの物語」 ('Cyfranc Lludd a Llevelys') には馬への言及は一切なく、「マクセン・ウレディクスの夢」 ('Breudwyt Macsen Wledic') においては、皇帝からつかわされた13人の使者たちがめでたく美女エレン (Elen) を見つけ出して、ルヴェイン (ローマ) へ戻ってゆく様子を

使者たちは、大急ぎで、夜となく昼となく旅をし、故郷をめざして帰っていった。馬を乗りつぶすとそれを捨てて、新しい馬を調達しながら旅を続けた。(144)

と描かれるところで、唯一馬が登場するのみである。

以上見てきた如く、中世ウェールズ幻想物語集『マビノギオン』の物語に登場してくる馬たちの姿は、それぞれの物語の成立年代や特徴を如実に示しており、いずれも長い年月をかけて紡ぎ出されてきたウェールズの人々と馬たちとの深い絆を伝えている。

IV ウェールズの風習や民話の中に登場する馬たち

A マリ・ルウイド (Mari Lwyd) の風習

何人かのならず者のような男たちの集団に引かれ、白い布ですっかりつつまれた馬の頭蓋骨をつけた異様な風袋の人物、「マリ・ルウイド」(Mari Lwyd)が、家々の門口に立って、お金や食べ物をねだるという風習は、18世紀から20世紀の初め頃まで、主として南ウェールズで見られたクリスマスの頃の冬の行事である。この集団のあとには、聖歌を歌ったり、踊りをおどったり、物まねをしたりする陽気な一団がついて歩くのが常だった。この行事はキリスト教化する以前の、ケルト社会に見られた、季節の変わり目に行なわれた豊穡を祝う風習の一つと考えられ、「灰色の雌馬」という名前は、この世とあの世(冬と夏)の入れ替わる中間のときを表す色「灰色」('lwyd)と、雌馬('mare)が交じり合ってきたと考えられている。このマリ・ルウイドがやってくるのは、クリスマスや十二夜やキャンドルマス(2月2日)といった季節の変わり目にあたるときとされる。しきりに家に入れてくれと頼むマリ・ルウイドと、そうはさせまいとする家人のやり取りには、冬と夏、内と外の世界の攻防の様子がしのばれる。



—スアンゲンウィドの「マリ・ルウイド」, 1910頃—
(Museum of Welsh Life)



—「マリ・ルウイド」—
(G. ボウラー著, 中尾セツコ他訳, 『クリスマス百科事典』, 終風社, 2007年より)

B 幽霊馬の話

人に危険を知らせたり、旅の途中で遭遇したりする不思議な馬の話は、ウェールズ各地に広く見られる民話の一つである。次の話は、その典型的な例である。

ある夕方、私は仕事でロス・イ・ウラド (Ros y Wlad) から帰ってくる時、よく幽霊がでることと知られるロスメヘリン (Rosmeherin) にやってきました。あの猫を見かけたところに来たとき、後を追ってくる馬の音を聞いたのです。場所をあけてやろうとして、道の脇によりました。けれどもどうしても馬は早く行こうとはしないのです。ゆっくり進むと、あちらもゆっくりとなります。早く進むと、早くなります。とうとう私は「今晚は」と挨拶してみました。返事はありません。「とてもいい夜ですね」と声をかけてみました。が、馬に乗った男は知らん顔です。「そうか、この人はイギリス人なのだ」と考えました。私はウェールズ語で話しかけていたからです。今度は英語で「今晚は」と言ってみました。返事はやっぱりありません。

もうこの頃になると、私はすっかり汗をかき、恐ろしさのあまり馬から転げ落ちそうになっていました。そして何とかしてこの男から逃れたいと思いました。紳士の姿をとって現れた悪魔だということが分かったからです。鞍ときらきら光るあぶみの音から、鞍は新しいものということが分かります。暗く細い道から広い道に出るところは少し明るくなっていましたので、勇気を奮い起こして、どんな男なのか確かめてみようと思いました。その馬はまるで兵士の乗る軍馬のように立派で、脚はまるで子牛のよう、靴は履いておりません。乗っている騎手もまた、子牛のような脚をしています。けれど恐ろしくて、とても頭や体まで見ることはできませんでした。やがて、道が交差しているところまでやってきました。ここで幽霊はたいいなくなると聞いていました。やっと、交差点につきました。けれど、ああ、そこで私は、地面がまるでこなごなになってしまうような、また天が落ちてくるような大きな音を聞き、彼(幽霊)の姿を見失ってしまったのです。どんなふうになくなったのか、またどの方向に行ってしまったのかはまったく分かりません。²⁾

このような幽霊馬の話は、各地に伝えられており、馬が現れる場所は川のそばや街道の上、また橋であったり、交差点であったりすることが多い。時間帯は夕方や夜といった、視界が定かでないときのことであり、人々に危険を教えることが特徴となっている。このような不思議な力を持つ馬が淡い色をしているのに対して、同じように不思議な予知能力をもつと考えられる犬の方は、黒い色をしていることが多い。

家畜としての馬がブリテン島にいたという痕跡は、新石器時代から残されてはいる。しかし考古学上それが明らかにされるのは青銅器時代からである。鉄器時代に入ると、ウェルシュ・マウンテン・ポニーの前身と見られる小型の馬が重用される。前述の馬の女神エボナの姿が現れるようになり、そこから現代まで続くマリ・ルウイドの風習が生まれたと考えられる。

中世の法令において、馬は、1) 乗馬用、2) 荷物運搬用、3) 農耕用の3種に分類されて、それぞれについての詳細な取り決めがなされている。12世紀のジラルダス・カンブレンシス (Giraldus Cambrensis) は、スペインの血統を持つポウイス地方の馬を高く評価している。これが十字軍とともにもたらされたアラブ系の馬と交配され、短脚で強健なウェールズのコブ種 (cob) の馬となったと考えられる。

18世紀以降は、大型のノルマンの軍馬系の馬が荷馬車馬や農耕馬として使われ、特に高地の農場

で雄牛にかわって、人々の生活を助けることになった。19世紀になると、乗馬用や軽い荷物を運搬するためのポニー種のような馬が盛んに使われるようになり、1990年代頃からは、炭鉱で働くポニーの姿が見られるようになる。1911年には、175,000頭いたと言われ、その数は1950年代まで減ることはなかった。しかし炭鉱の閉山と石炭工業の衰退によって、その数は激減し、現在では専らマウンテン・トレッキング等の観光目的で飼われているにすぎない。

このように、犬や馬といった、人間の生活とより深くかかわりをもった動物たちと人々との親密な付き合いは、長い歴史を経る中で構築され、民話や口承で伝えられてきた物語の中にさまざまなエピソードが語り継がれ、ウェールズ各地に残されている。いずれも、狩と農耕に明け暮れた人々の文化の中から生まれた物語であることが分かる。

注

- (1) 使用テキストは、中野節子訳、徳岡久美協力、『マビノギオン—中世ウェールズ幻想物語集』（JULA出版局、2000年）による。（ ）の数字はページを表す。
- (2) Ceredig J. Davies, *Folk-Lore of West and Mid-Wales* (Aberystwyth, 1911; reprint Llanerch Publishers, 1992), p. 173-4 による。

参考文献

- 1) Bromwich, Rachel (ed.), *Trioedd Ynys Prydein: The Welsh Triads*, 3rd edn. University of Wales Press, Cardiff, 1998.
- 2) Bromwich, Rachel and D. Simon Evans (eds.), *Culwch ac Olwen*, University of Wales Press, Cardiff, 1992.
- 3) Davies, Sioned and Nerys Ann Jones (eds.), *The Horse in Celtic Culture: Medieval Welsh Perspectives*, University of Wales Press, Cardiff, 1997.
- 4) Davies, Sioned (trs.), *The Mabinogion*, Oxford University Press, Oxford, 2007.
- 5) Evans, J. Gwenogvryn (ed.), *Llyfr Gwyn Rhydderch* 2nd edn. University of Wales Press, Cardiff, 1973.
- 6) Goetinck, Glenys, *Peredur. A Study of Welsh Tradition in the Grail Legends*, University of Wales Press, Cardiff, 1975.
- 7) Goetinck, Glenys (ed.), *Historia Peredur vab Efracw*, University of Wales Press, Cardiff, 1976.
- 8) Jarman, A.O.H. (ed.), *Llyfr Du Caerfryddin*, University of Wales Press, Cardiff, 1982.
- 9) Jarman, A.O.H. (ed.), *Aneirin: Y Gododdin, Britain's Oldest Heroic Poem*, Gomer Press, Llandysul, 1988.
- 10) Jenkins, Dafydd (ed. and trs.), *The Law of Hywel Dda*, 3rd edn. Gomer Press, Llandysul, 2000.
- 11) Jones, Gwyn and Thomas Jones (trs.), *The Mabinogion*, Dent, London, 1949.
- 12) Mac Cana, P., *Branwen Daughter of Llyr*, University of Wales Press, Cardiff, 1958.
- 13) Richards, Melville (ed.), *Breuddwyd Rhonabwy*, University of Wales Press, Cardiff, 1945.
- 14) Richards, Melville (trs.), *The Laws of Hywel Dda (The Book of Blegywryd)*, Liverpool University Press, 1954.
- 15) Thomson, R. L. (ed.), *Owein or Chwedyl Iarllus y Ffynnawn*, Institute for Advanced Studies, Dublin, 1968.
- 16) Thomson, R. L. (ed.), *Ystorya Gereint Uab Erbin*, Institute for Advanced Studies, Dublin, 1997.
- 17) Thorpe, Lewis (trs.), *Gerald of Wales: The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, Harmondsworth, 1978.
- 18) Williams, Ifor (ed.), *Breuddwyd Maxen*, University of Wales Press, Cardiff, 1922.
- 19) Williams, Ifor (ed.), *Pedeir Keinc y Mabinogi*, University of Wales Press, Cardiff, 1930.

